

はじめに

本誌が刊行される2020年度は、新型コロナウイルス感染症の世界的な流行によって社会生活が大きく制限され、個人も組織も様々な変化を経験する1年となりました。当センターも例外ではなく、これまで続けてきた行事や取り組みの一部について、中止や規模縮小を決断せざるを得ませんでした。そうしたなか、多くの方のご協力によってオンラインでシンポジウムを開催できたことをたいへんありがたく感じております。この場を借りてお礼申し上げます。

シンポジウム「受験学力形成を目指さない中高一貫教育は研究者養成にどう貢献するのかー名大教育学部附属中・高等学校出身者による『中高大院』接続シンポジウムー」の記録は、この高大接続研究センター紀要第6号の第1部に収録しています。当日は4名の現役研究者がまずそれぞれに自身の学校・大学生活を振り返り、つづけてディスカッション、フロアからの質問への回答を行いました。本誌にはその逐語記録に加え、後日コーディネータが執筆したコメントリーを掲載しています。当センターが「高大接続型学力」として研究している知的能力が学校・大学生活を通して維持され、その後の職業生活にまで持ち越された事例とそれに基づく論考として、興味深くお読みいただけるものと思います。

第Ⅱ部には当センター専任教員の論考を2本掲載しています。「アメリカの大学の入学者選抜に今後大きな変化が起きるか?」では、米国大学の入学者選抜に関わる専門職団体NACACの倫理要綱から2019年に削除された項目の分析を通して、大学の機能と意義に関する米国社会の認識の変化を考察しています。「高大接続改革の問題と今後必要な研究に関する試論」では今日の高大接続改革の問題点を指摘し、その解決に必要な研究とは何かを論じています。前号の巻頭言で言及したセンターのミッションの一つ、「高大接続型学力とはどういうもので、高校卒業までの期間にそれはどのような条件で育成され、大学ではそれがどのように発揮されるのか」を明らかにする必要性と方法を緻密に検討した論考となっています。

きたる2021年度は第1回目となる大学入学共通テストを経験した生徒たちが大学生となる最初の年です。彼らと共に進行中の高大接続改革を評価していくとともに、昨年度あわてて導入せざるを得なかった、遠隔講義を始めとする安全のための取り組みを洗練させていくことが、今の大学には強く求められています。引き続き事態を見守りながら、高大接続についていっそう貢献できるセンターとして発展させていきたいと考えています。どうぞよろしくお願い致します。

高大接続研究センター長 教育発達科学研究科副研究科長・教授 柴田 好章